

復興への一歩一歩

田麦山ロードレース大会



いよいよ明朝

九時半スタート！

田麦山ロードレース大会

中越大震災で開催が危ぶま

れた田麦山ロードレース大会

は、いよいよ明朝九時半スタート。今年は小高・山の相川間の道路が通れないため、十五キロコースは小高で折り返した後、田麦山小学校前を通り、川口小学校で再び折り返すというルートになります。沿道で元気いっぱい観戦・応援をお願いいたします。

復興祈念弁当が配られます

明日十二日(日)午前十一時、田麦山スポーツ振興会より「復興祈念弁当」が配られます。この新聞と一緒に届けられた「弁当引換券」を持って、所定の場所へ起こしてください。この弁当の作成は「災害復興支援ボランティアネットワーク桐生」の方々九名にお願いしました。仮設住宅へ炊き出しに来てくれたグループです。明朝五時に群馬県桐生市を出て、弁当作りにやってきてくれます。

またこの弁当の包み紙は、田麦山出身の登山家・森山勇さんが描いた、田麦山の茅葺き家屋のスケッチです。懐かしい文明館の絵もあります。弁当を召し上がりながら、ご覧ください。



発行：田麦山自然塾

たくさんの方の応援と協力が結集します

救護ボランティアは例年通り、小千谷 谷口医院の谷口先生と看護士の方々です。今年はさらに、日本赤十字特殊奉仕団員五名が来て、万全な救護体制をとります。

また、震災以来、大勢のボランティアを送り込んでくれた湯沢町は、選手用のおにぎり千個とバナナを提供。選手用ゼッケンはいつも通り(有)シャイニングが提供。そして今年も、NPOお山の森の木(阿賀町)が、田麦山小学校の子どもたちが歌う「はるかなるふるさと田麦山」の歌詞の木彫りプレートを作ってくれました。これは参加賞として選手全員に配られます。

このほか、大勢のボランティアが走路員やレース先導バイク隊などで活躍してくれます。

今年後半の田麦山カレンダーができました！

田麦山のやさしい風景が配されたオリジナルのカレンダー、お役に立っていますか？ 今年後半の分ができましたので、この新聞と一緒に配布します。今回も、東京のデザイナー・もりあつひこさんと、もりさんと懇意の印刷会社のご協力により、田麦山小学校の子どもたちが描いた楽しい絵が、カレンダーを彩っています。ぜひ活用ください。

田麦山の週間天気予報

「一週間のお天気」

十二日はくもり、お昼ごろ一時晴れ。

来週は大きな崩れもなく、

だいたいくもり。

今日のひとこと

復興への熱い願いをかけた田麦山ロードレース大会。元気いっぱい走って、応援して、心地よい汗を流しましょう。

田麦山自然塾などを通して「この地区のスポーツ振興と発展に尽力してください」という宇佐美彰朗氏より、「田麦山ロードレース大会」に寄せて激励文をいただきましたので、ご紹介いたします。

復興への架け橋「田麦山ロードレース大会」

震災後一年も待たずして、復興の先陣を担うかのように「田麦山ロードレース大会」が開催されることに、多くの方々が驚きを感じておられることでしょう。

この大会を牽引する「田麦山スポーツ振興会」メンバーの皆様には、最大級のエールを送らせていただきます。と同時に選手の皆様には是非とも、復興へのエールとなる活躍を期待するところです。

地域復興のため、スポーツが少しでも架け橋となることを、心よりご祈念申し上げます。

宇佐美彰朗

「宇佐美彰朗氏プロフィール」

新潟県吉田町生まれ。東海大学教授、NPO法人NSVA代表。一九六八年メキシコ、七二年ミュンヘン、七六年モントリオールと、オリンピックに三回連続出場。またフルマラソン公認大会に四十一回出場し、すべてのレースを完走。自己最高記録ノ二時間一〇分三七秒八。



ホームページ <http://www.usami-akio.com/index.html>

「お便りコーナー」恩師を訪ねて

佐藤栄吉(大形)

土井篤子先生。昭和三十三年度小学校卒業の我々が一年から三年まで担任していただいた先生です。そしてもうひとり、楚山(相沢)禮子先生。六年生のとき新潟への修学旅行に引率いただいた先生です。昨年、田麦山新聞で、涌井清嗣さんに震災復興祈念を託されたという記事が目にとまり、それ以来音信が始まりました。

お二人とも同じ上越市で、お近くにお住まいとわかり、今回両先生を訪問しました。

土井先生は平成十一年三月、長岡・蓬平温泉での同級会以来。昨年秋に伺う予定だったが、震災で中止。半年遅れの訪問となりました。

土井先生はお体が不自由で、ベッドに休んでおられました。涙の再会。血色もよくお声には張りがあり、六年前とお変わりなく安心。ご主人様や若奥様がもてなしてくださったおいしい料理を、先生と同じ部屋でいただきました。帰りにはテラスまで出てこられ、にこやかに手を振って見送っていただきました。

楚山先生は、ご自宅の前で我々を迎えてくださり、手製の湯のみでお茶をいただいた後、市内の料理屋へ。すっかりご馳走になり、杯を重ねてしまいました。まさに五十年近くの空白を埋める再会でしたが、全く違和感なし。また、たくさんのアルバムを持ってこられて、懐かしい写真の顔を指し、すらすらと名前をおっしゃっていました。先生が焼かれたぐい飲みを全員

がいただき感動。また両先生からは、それぞれに同級会へ多額のお心付けをいただき恐縮至極。本当に「おじやま」しに行つたような訪問でしたが、大変喜んでいただき、「教え子」冥利に尽きる旅、そして「田麦山の生徒でよかった」冥利に尽きる旅！ 両先生の共通の思いは「田麦山の復興と美しい自然の復活を心から祈っています」でした。

薫風や 高田路はるか 時空超え

渡る風 美しき波の 青田道

まぼろし食堂 第二部

作 つぎのわ

六夕やみの空へ

風氏はしばらくぶりに、モリヤマ工業の前に立っていた。懐かしいその場所は、やっぱりどこから見てもモリヤマ工業だ。でもよく見ると、ドアや窓があつちこつちに吹き飛んで、工場の中は足の踏み場もなかった。いつも響いていた楽しいななミシンの音も聞こえない。

かつて食堂だった二階に上がる階段は、くずれ落ちた壁や物で埋まっていた。オクマツタ村に今人の気配はない。

泥だらけの足を引きずって、風氏は田麦山の中心部へと歩き出した。

田麦山小学校は、地区のちょうど真ん中にある。生徒数は全学年あわせて五十二人。その小さな学校に、田麦山じゅうの人が集まっていた。大きな余震が続くので、誰も建物の中へは入れない。

ゆうべは数百人もの人たちが、文化祭のために準備してあつた餅をついて、皆で分けあつて食べた。それから校庭にブルーシートを敷いて、寒いひと夜を過ごしたのだった。

そろそろ二日目の日が暮れる。帰る家のない大勢の人たちは、たき火を囲んでじつと耐えていた。その中に、オクマツタ村の人たちの姿があつた。

「おや。あれはひよつとして風氏でないかい」

「あれ、ほんとだ。どつから来たろうか」

その人影は、なにやら大きな袋を抱えていた。夕やみに包まれた校庭のかたすみで、風を集めるように、大きな手をふわりと動かした。それから、空へ向かつて袋の口を大きく開いた。

ぼわり。

淡い虹色をしたまぼろし玉がひとつ、浮かび上がった。またひとつ。それから、数えきれないまぼろし玉がぼわぼわとやみに漂い出した。

皆で汗を流した田植えの泥の匂い。ヘッペ(ヘビ)と出会って腰を抜かした細い山道。黄金色に垂れ下がる稲穂の波。薪ストーブの横でわらぞりりを編んだ手の感触。長靴をキュッキュと鳴らして歩いた雪ぼたるの道。ひとつひとつのまぼろし玉は、田麦山で生まれたたくさんの記憶のカケラだ。

じつとたき火を見つめる人たちの胸に、なにか切なくて美しいものがよぎった。それは、決して消えることのない大切な宝もの。

「また来年も、田んぼがやりたいなあ」

誰もがそんなふうに思える、静かな夜だった。

(第二部 おわり)

ご要望やお問い合わせ、記事投稿は 0258-89-4011 / nekka@tamugiyama.com までどうぞ。